

(様式3)

農業研究成果情報

No. 751 (平成28年5月) 分類コード 02-09 熊本県農林水産部

無加温ハウス栽培「不知火」の3月採取する1樹あたり完熟果割合は3割程度が望ましい

無加温ハウス栽培の「不知火」の3月採取は、従来の1月採取に比べ糖度が高く、クエン酸濃度が低く果実品質が向上する。また、3月採取の割合を1樹あたり3割にすると5割に比べ隔年結果が抑制でき、果実品質は良好である。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 相川博志)

研究のねらい

「不知火」の無加温ハウス栽培において、高品質で食味が良好な完熟果実を生産し、連年安定生産するための栽培管理技術を開発する。

ここでは、通常の1月収穫と樹成りの3月収穫の果実品質の違いを明らかにし、連年安定生産が可能な樹成り完熟果の割合を明らかにする。

研究の成果

1. 無加温ハウス栽培「不知火」の3月採取は、1月採取より糖度が高く、クエン酸濃度が低い(図1, 図2)。
2. 3月に採取する果実の1樹あたり着果割合3割は、5割に比べ糖度は高くなる(図1)。
3. 3月に採取する果実の1樹あたり着果割合3割は、翌年の収量減少が10%以下に対し、5割では30%以上となる(図3)。
4. 3月に採取する果実の果皮色は、着果割合の違いによる差はない(データ略)。

普及上の留意点

1. 本成果は、所内の無加温ハウス栽培「不知火」(樹齢24~25年生)の結果である。
2. 完熟果3割区は、1月に樹冠上部および赤道部の果実を中心に全着果量の7割を採取し、残り3割を3月に採取した。
2. 新梢の発生が少ない着果過多樹や樹勢低下樹で3月まで着果させた場合、翌年の着果量が大幅に減少し、隔年結果を助長するので完熟栽培は避ける。
3. 完熟栽培で3月に採取する果実は、1月時点で糖度が低く、酸が高い樹冠下部の果実を中心に残す。

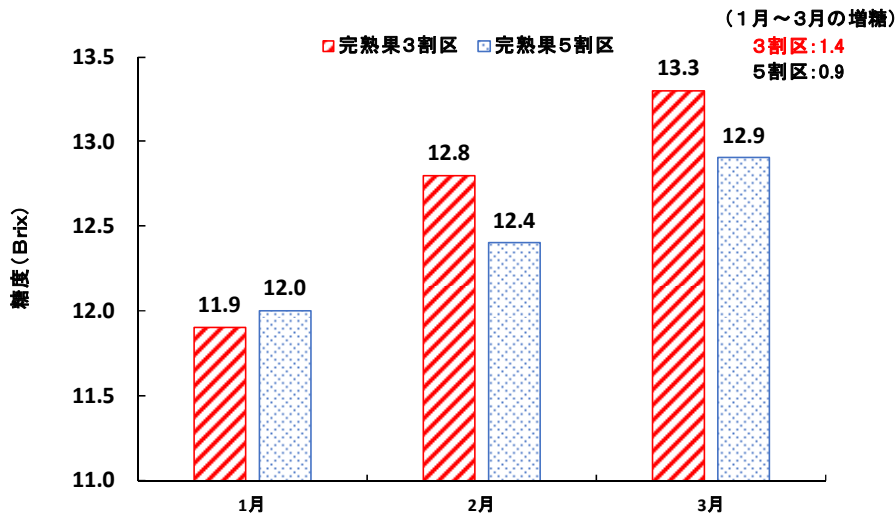


図1 無加温ハウス栽培「不知火」における1樹あたりの完熟果割合と糖度

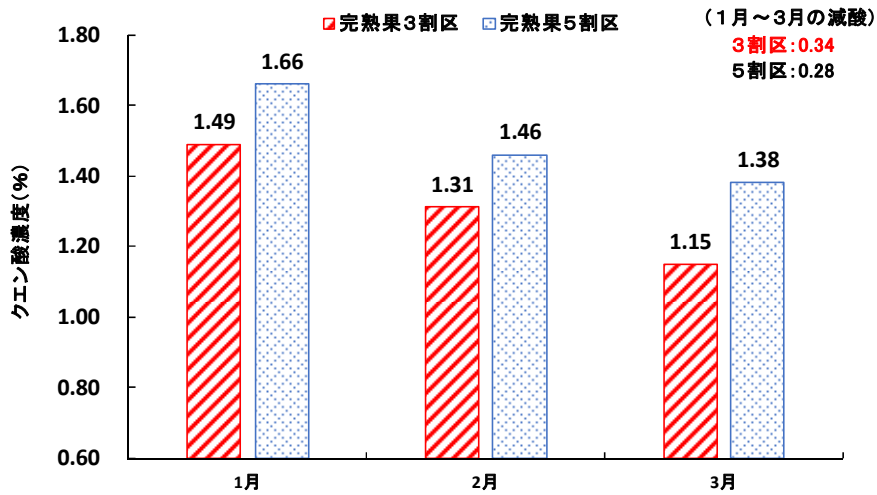


図2 無加温ハウス栽培「不知火」における1樹あたりの完熟果割合とクエン酸濃度

注1) 図1および図2の数値は、2013年産および2014年産の平均値。

注2) 2013年産 1月:2014年1月15日, 2月:2014年2月17日, 3月:2014年3月17日採取
2014年産 1月:2015年1月15日, 2月:2015年2月19日, 3月:2015年3月20日採取

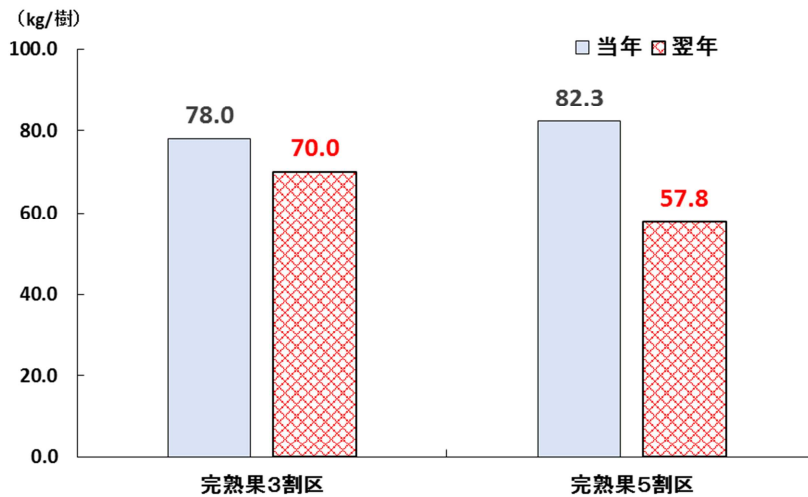


図3 無加温ハウス栽培「不知火」における1樹あたりの完熟果割合が翌年の収量に及ぼす影響